



館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2010.April No.168



新入生にイチ押しの1冊

- | | |
|--|---|
| <p>1 「危機と欲望」
図書館長 尾上 修悟</p> <p>2 ブックレビュー 新入生にイチ押しの1冊
「イエスの生涯」 宗教部長 相模 裕一
「青春(Youth)とは」 学生部長 伊藤 龍峰
「ソロモンの指環:動物行動学入門」 教務部長 中村 奈良江
「14歳からの社会学:これからの社会を生きる君に」 図書情報課 小川 ゆきえ
「ばくが医者をやめた理由(わけ)」 図書情報課 小副川 明子
「わらのこはん」 図書情報課 海金 美穂</p> | <p>3-4 世界の図書館 北米編
Western Washington University Library(Wilson Library)
文学部 英文学科 教授 フランク E.オスターハウス
イリノイ大学図書館 人間科学部 児童教育学科 教授 門田 理世
ジョージア工科大学図書館 図書情報課 相田 英美子</p> <p>5-6 使ってみようシリーズ(12)
冊子体資料も使ってみよう! 図書情報課 山下 大輔</p> <p>7 蔵書ギャラリー no.9
『ヴァティカン写本:ファクシミリ版』 神学部 神学科 教授 須藤 伊知郎</p> |
|--|---|

2007年の夏以来、世界は百年に一度とも言われる大金融危機に見舞われた。今日においてもなお、それが終息した訳ではない。その背後に何があったのか。様々な理由が考えられる中で、人間の心理の側面から、バンカーを中心とする金融業者の強欲(greed)が、今回の危機を引き起した、という点が内外で盛んに指摘されている(神谷[4])。greedという言葉は、辞書によれば、必要とするもの以上の富に対する強い欲望を意味する。このような、金融ビジネスに従事する人の庶民感覚とはかけ離れた金銭欲に対し、公衆はついに怒りを爆発させた。かれらは例えば、2009年春のロンドンG20の前にして、「金持をやっつけろ」というプラカードを掲げて大銀行に押し寄せた。それはさながら、あのフランス革命前夜を思い起させるほどのものであった。実際に、金融業者の強欲は、超高額報酬に典型的に現れているし、かれらの見せつけた傲慢な態度は筆舌に尽し難い、と言ってよい。

では、そうした資本主義ビジネスに携わる人々の異常な欲望が、今回の件で初めて表されたのか、と言えば決してそうではない。そもそも、人間の欲望と資本主義の発展は、不即不離の関係をこれまで保ってきた(佐伯[5])。資本主義は、本来的に商品の販売市場を必要とする。しかも、その際の市場は、飽和を回避するために国内外で次から次に拡張されねばならない。そのために、人々の商品購入に対する欲望を人為的に創り出すことが考案される。それによって、商品と市場の自己破壊的狀況を脱け出すことができる。同時に、消費志向の同一化がグローバルな規模で図られる。そこで、そのような人々の消費欲が、果して正常な心理に基づくものなのか、という点が問われる。結局、その際の消費とは、人工的に刺激された幻想を満足させるものでしかないのではないか。今回の危機で露呈した、高いリスクを伴う金融商品の広範な販売も、人々の欲望を開発することによって促進されたものであった。

他方で、人間の欲望が、内から沸き上がってくる点にも注目する必要がある。スペインの偉大な思想家J.オルテガは、19世紀の資本主義世界における人間像を、欲望の観点から見事に活写している(オルテガ[3])。紙幅の制約の中で、ごく簡単に彼の行論を整理すると次のようになる。19世紀の大衆は、あらゆる面で物質的安楽さに浸りながら、それに感謝するどころか、それを要求すべき権利に変えてしまった。その心理の奥底には、際限のない欲望が潜む。それはまさしく、甘やかされた子供の心理につうじる。そこでは、一切が許されると共に、何の義務も負わされない。かれらは、自分自身の限界を知ることがなく、

また他人を考慮することもない。大衆は専ら、文明の恩恵だけを断固として求める。このような19世紀の新しい人間に、実は欲望を満たすための強力な手段が与えられた。それらは、経済的、肉体的、市民的、並びに技術的な手段を指す。結局、かれらの魂の基本構造は、自己閉鎖性と不従順さから成る。この甘やかされた子供達は、人間のあり方として欠陥を持つ。他人を考慮する度合に応じて未開の程度を測るとすれば、かれらこそはまさに、野蛮人としての文明人そのものを表す。

以上に見るオルテガの文明人分析は、彼がいかに慧眼の士であったかを如実に示す。事実、そうした分析から1世紀近くを経た今日において、彼の描いた野蛮人が、この極度に文明化された世界でどれほど横行しているか。現代人はまさしく、忘恩と不従順さの極限に達しているのではないかとさえ思えてくる。我々は今、「ニーズ(needs)」という言葉をしばしば口にし、耳にする。このニーズが、果して正当な要求のみを意味するかどうか。そこには、「行き過ぎた欲求」という面も含まれているかもしれない。この点を省みずに、ただ必要な権利として、我々は要求し続けているのではないか。この野蛮人としての発想が正常でないことを、オルテガは我々に明快に説いて見せてくれた。

青年心理分析を専門とする岡田尊司氏は、現代社会を、人間の心理の側面から「自己愛型社会」と位置付ける(岡田[2])。人類は確かに、無限の欲望という毒の入ったパンドラの箱を開けた。そこには、人々の傲慢さと驕りが渦巻いている。このような人間の悪行に対し、古来より制裁が与えられてきた。ギリシャ時代に見られた傲慢罪はその典型であろう(エリオット[1])。しかし、そうした戒めも束の間の事として終る。ローマ時代に入ると、帝国の持つ絶大な権力の下に人々は自己愛に浸り、かれらの欲をむき出しにした。その結果は、言うまでもなく帝国の崩壊であった。岡田氏は、エゴイズムに基づく自己愛の終局は自己破壊であることを説く。人間の強欲は、果して金融業者の間にのみ現れたのであろうか。それは、あたかもメフィストフェレスに導かれたかの如く、人々の心底に忍び込んだのではないか。だとすれば、今こそ我々は、現代資本主義社会の崩壊を防ぐためにも、自己の欲望制御に向かうべきであろう。

(参考文献)

- [1] L.エリオット・D.アトキンソン著(グリーン裕美・阪本章子訳)『市場原理主義の害毒 イギリスからの眺め:世界経済・失敗の本質』PHP研究所、2009[開架3階 333/6/628]
- [2] 岡田尊司著『自己愛型社会:ナルシスの時代の終焉』平凡社、2005[開架3階 361/5/328]
- [3] J.オルテガ著、桑名一博訳『大衆の反逆』白水社、1991[開架2階 136/071/2]
- [4] 神谷秀樹著『強欲資本主義ウォール街の自爆』文芸春秋、2008
- [5] 佐伯啓思著『「欲望」と資本主義:終わりなき拡張の理論』講談社、1993[開架2階 09K/332/5]



新入生にイチ押し☆の1冊



『イエスの生涯』

遠藤周作著
新潮文庫 2005年
(開架2階 095/913/11-2)
宗教部長
経済学部 経済学科 教授 相模 裕一



この本が単行本として出版されたのは37年前の1973年です。当時、高校生であった私はこの本を購入したものの、小説とは異なる聖書学的評伝に辟易し、途中で読むのを止めてしまいました。大学生になり、キリスト者の知人や牧師がこの本を厳しく批判しているのを知り、改めて読んだことを思い出します。ここで描かれているイエスは、奇跡など起せぬ無力なイエスであり、ただ、苦しむ人々の傍らにあって、共に苦しみ、共に悲しむ同伴者イエスの姿です。遠藤周作氏は日本人向けのイエス像を示そうとしたようですが、英語、イタリア語、中国語にも翻訳され、海外にも広く読者層を獲得した本となりました。読みにくい本ですが、是非読破して欲しい本です。

『ソロモンの指環：動物行動学入門』

コンラント・ローレンツ著(日高敏隆訳)
早川書房 2006年
(開架3階 481/78/58-2)
教務部長
人間科学部 児童教育学科 教授 中村 奈良江



コンラント・ローレンツは、あの有名な「刷り込み」の理論を打ち出した人です。この本を読んでいると、「刷り込み」の理論の発見や構築の背景となる、長時間にわたる観察と、なにより動物達への限らない愛情が伝わってきます。本の中に書かれている1つ1つのエピソードは、ほとんどがたわいもない事ですが、その動物の特性についてとても良く書かれており、私たちが自然界の動物を見る時に、行動の意味を理解する手だてになる専門書でもあります。しかし、ただ読み物として読んだとしても十分に面白く、思わず微笑んでしまうものです。そして読んだ後に、なぜか、自分もこれほどの忍耐と観察を持って物事に取り組みたいと思うようになる不思議な本です。

『ぼくが医者をやめた理由(わけ)』

永井明著
角川文庫 1998年
(開架2階 099/490/1-1)
図書情報課
小副川 明子



著者は国家試験に合格し、病院勤務を始めます。一見順調な道を歩んでいくかとも思われますが、医者をやめてしまいます。膨大な仕事に追われる医療現場で、医者とは、病気とは、病人とは、医療とは何かという根本的な疑問を抱き続けた結果でした。

この本を読んで、著者が医者をやめた理由ははっきりとわかりません。著者自身もその答を探しながら書いているのです。しかし、忙しい毎日に若い医者が抱く充実感と、あまりの忙しさに「病人よりも病気を診る」と化した現場で募る、これでいいのかという焦燥感は直に伝わってきます。

ユーモアたっぷり、最初から最後まで笑わせてくれますが、深く考えさせられる。そんな1冊。お勧めです。

『青春(Youth)とは』

サムエル・ウルマン原作詩 新井満自由訳
講談社 2005年
(開架4階 931/U61/2)
学生部長
商学部 商学科 教授 伊藤 龍峰



この本は、壮大な自然の風景写真を背景に、ウルマンの詩「Youth」の訳詩を記した、いわゆる写真詩です。風景と詩の内容とが読む者の脳裏で混然一体となって、詩から得られるイメージに、さらなる広がりを与えてくれるかのようです。

『Youth』は、言い古された言葉であるかもしれませんが、青春と年齢との間に相関関係はないということをメッセージとする詩です。若者の中には年齢は若いけれども精神的老人がいますし、その反面、年配者の中には高齢にもかかわらず青春を謳歌している人達があります。その差は、何かに対して夢や情熱を持ち続けているかどうかであると、ウルマンは言っています。

私達は、人生のあらゆるときに夢や情熱を持つことができます。しかし、若い日の夢や情熱と、年齢を重ねたときのそれとは質量ともに異なるのかもしれません。どうか、みなさん達は、今の若い精神と身体のための青春を大いに味わってください。

『14歳からの社会学 ：これからの社会を生きる君に』

宮台真司著
世界文化社 2008年
(開架3階 361/Mi71/1)
図書情報課
小川 ゆきえ



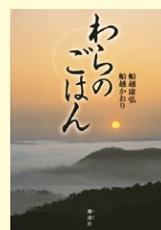
「いまの時代、本当に先が読めない。10年後、何か起こってもあたふたしないように免疫(めんえき)をつけておいた方がいい。」と著者は読者に呼びかけます。

タイトルに『14歳からの〜』とありますが、〈就職〉や〈恋愛〉など、大学生にも親しみやすい切り口で、現代社会を生き抜くにはどんな訓練が必要かを教えてくれます。社会学の専門用語も出てきますが、横書きで、語りかけるような文章が、読みやすさを感じさせます。

これからどんな人生を歩みたいか、目標を決めている人もまだの人も、自分の生き方を考える上での参考に、一度読んでみてはいかがでしょうか。私が学生の頃にこんな本があったら、きっと何かしらの影響を受けたらと思う1冊です。

『わらのごはん』

船越康弘、船越かおり著
地湧社 1999年
(開架2階 596/0/158)
図書情報課
海金 美穂



葉物野菜の根を1〜2時間、花瓶やボールに入れておくと、再び息を吹き返します。その蘇生したピンツとした命を透かさず調理し、ゴクツとお命丸こと頂戴します。水に浸しておくと、一週間程で発芽する玄米。微生物や菌類が生きている、糠床の魔法にかかった胡瓜、人参…。食べ物を食べると運命が変わる。もちろん、好転させたいと思いません。ヒントはこの本の中に。何はともあれ、Welcome to our library♡♡♡!!!

世界の図書館

[北米編]



[Wilson Library South Entrance]



[ジョージア工科大学図書館]



[イリノイ大学図書館]

Western Washington University Library(Wilson Library)

Western Washington University Library (Wilson Library) :
516 High St. Bellingham, WA <http://www.library.wvu.edu/>

The Community of the Mind

文学部 英文学科 教授

フランク E.オスターハウス

Whenever I wanted peace of mind—even as a kid—I would head to the library to soak up the atmosphere. So, when I headed off to Western Washington University in Bellingham the Wilson Library became my preferred place to relax between classes, and I would often spend long afternoons there just reading the newspapers and magazines or browsing through the books.

However, the library began to take on new meaning for me as I started to dig into my major subject of English Literature. Over the years I became familiar with many of the people who worked at the information desks, especially the one in the Literature section of the library (every major section had a central desk to help people who were in need). The person in charge of each of these sections normally was a trained librarian and each librarian had a number of assistants that were normally students who did it to help pay for their education. The service of these people—both professional and amateur—was invaluable, and they always had time to track down obscure references and hard-to-find articles. They were always very kind and extremely generous with their time. With them the search for information—the search for knowledge—was a collaborative affair. And they knew their area to perfection. And in the rare case when the library didn't have what we needed, they would order it. These extraordinary people were dedicated and enthusiastic guides to the knowledge stored in the library stacks. This was the time when I truly began to understand the timeless collaborative nature of the search for knowledge and its acquisition.

The second part of that lesson occurred at the same time in that same Literature section. On that floor (as on every floor), there were many semi-open alcoves with easy chairs and couches and low tables to make for a comfortable place to relax and read. However, it was difficult to study with others in those open places because the noise would disturb people. To overcome this problem, the library was designed with many small rooms located at intervals along the walls. Each of these study rooms was equipped with a table and chairs that could

accommodate four people (now the library also has rooms for eight outfitted with blackboards (or whiteboards) as well as projectors, screens, Internet capability and computer hook-ups). Each room was also designed with soundproof glass so that people outside the room would not be disturbed. Those study

rooms became instrumental to my study habits, as I would often meet with friends before and after class to share, prepare, and discuss whatever we were currently studying. In those rooms we forged strong friendships based on the common aspiration of searching for truth and clarity. Needless to say, the friendships stretched out to the network of librarians and teachers who helped us in our endeavors. We became a community—a community of the mind (and that included the centuries-old minds that still spoke through the books!). And that to me is what a library is—not the building but the people sharing what they know. As we struggled to understand the writings and thoughts of people from different backgrounds,

cultures, and times, ranging from poets like Homer and philosophers like Plato to modern day writers and thinkers, I realized the immense vastness of thought and expression that the library represented: it was and still is a timeless global network of ideas—a community of learning where thought was shared among people both near and far, both living and dead.

I haven't been back to the Wilson Library for a few years, but the American university library system still serves me well. Just recently I received copies of original source material concerning my investigation of Indian thought and oratory as well as my investigation into the American dream, from the great libraries of the University of Washington (a system that includes roughly fifty different libraries) and of the University of California. All it took was entering their virtual portals through the Internet, browsing their collections, and then emailing their wonderful librarians to forward the information I needed. I have also received books and manuscripts through the Interlibrary Loan system. The community of the mind is indeed a timeless, global community.

(Photos were taken by Eileen Osterhaus, currently studying Music and History at WWU)



[One of the Wilson Library lounges]



[One of many basic study rooms]

アナログ空間の創造

人間科学部 児童教育学科 教授 門田 理世

図書館を見れば大学の価値がわかる。アメリカでは大学運営費の殆どを研究者の獲得と図書館に費やす。よい図書館がなければ優秀な研究者を確保できず、また、よい研究者がいなければ図書館の充実はない。そしてその両輪がなければ、良質の研究、優秀な学生の育成ができず、大学の未来は潰えるという原理に基づくものである。実際、図書館の評価(蔵書数、スタッフの専門性・雇用形態・人数、開館時間、公共性など)は大学評価に直結している。今回は、大学の心臓である図書館が大学を価値づけることを意味を私が卒業したイリノイ大学の図書館を通して考えてみたい。

1867年に創設され、全米大学図書館第3位の蔵書数を誇るイリノイ大学図書館は、10階建てのMain Libraryと地下2階のUndergrad Libraryの2棟から成る。重いドアを開ければ、大理石の回廊の奥から古い紙とインクの匂いが漂い、心地よい靴音が聞こえてくる。ここに来れば、万物創生からその現状や行く末までに至る全ての英知を享受されるような安心感に包まれる。

Main Libraryの蔵書は1千万冊を超え、それらは学部毎の図書館・アーカイブス・書庫に分別される。各図書館には学部専科の司書・アーキビスト・補助スタッフが常駐していて、彼らはどんなに断片化した情報からでも文献や資料を探し当て、研究者の一助となってくれる。特に困難を極めた検索事例はその都度フィードバックされ、文献の充実や検索方法の

整備など、更なる大学図書館としての質の向上に充てられる。Undergrad Libraryは学部生図書館としては全米一の蔵書を有するだけでなく、『情報処理・調査法』や『レポートの書き方』といったコースを学部とタイアップして提供し、学生の学力向上に貢献している。

蔵書・人材・学習支援の充実に加えて、利用者が終日過ごせる空間になっているかどうかは図書館の生命線と言える。デジタル化された現代においても読書や思考にかけける時間は短縮できない。書物と対話しながら、自分自身と向き合って思考を巡らせることが許される場所が保障されていることは大学図書館の必須条件であろう。掛け心地の良いソファや椅子。落ち着いた光でまとめられた一角。天窓からこぼれる太陽で暖められた一室。そして、心を落ち着かせる香り漂うカフェ。集中したり休息したり人と談話したり、その時の心もちによって、本や資料を片手に空間が選べる。ここにいたいと思う心地よさがそこにはある。

誰が何をして同じ結果をはじき出してくるデジタル社会で、私でなければ手に入れないもの～匂い。靴音。専門家の熱意や協同。そして、書物と対話できる場所～を演出してくれる心落ち着く空間としての図書館は、頑ななまでにアナログ社会の象徴として君臨していなければならないと思う。卒業した今でも自分の居場所が見つけれられる図書館に大学の価値を見出したい。(Photos courtesy of Jean Mendoza Ph.D.)



[写真1: リファレンスブック]



[写真2: 図書館の一角]

ジョージア工科大学図書館

Georgia Institute of Technology Library : 704 Cherry Street, Atlanta, GA
http://www.library.gatech.edu/

人と人が集い、学びあう場 ― 図書館の新しいカタチ

図書情報課 相田 芙美子

ジョージア工科大学(*)図書館では、ワクワクするような空間を提供しています。

右の写真を見てください。これは図書館の西棟2Fにある、共同ワークスペースです。ここでは、学生が自分の授業やゼミで出された課題や発表の準備をグループで行っていました。4人がけの椅子と机が3組、白いメッシュのロールカーテン。写真1の左手の仕切りの反対側にも同じような空間があるのですが、白いボードのようなもので仕切られています。

実は、「白いメッシュのロールカーテン」はプライバシーを守りつつ、空間を仕切るためのもの。使わない時は上げておけば開放感が広がります。白いボードのようなものは「ホワイトボード」(写真2)で、グループでの話し合いにも使いつつ、間の仕切りにもなっています。この空間はグループ学習室と違って、予約は必要ありません。必要な時に集まってすぐ話し合い(声を出すこと)をすることが可能です。また、このフロア全体で無線LANが使えるため、学生は自分のノートパソコンを持ってきて、データベースやインターネットからの情報も使いつつ、まとめ作業をしていました。

開放的で居心地のよさそうな空間ですね。このような空間があったらグループでの作業もはかどるのではないのでしょうか。もちろん、図書館の中が全てこのような空間ではなく、従来の静かに集中できる個人

用の学習空間、本や雑誌も別のフロアで提供されています。用途別にフロアが区分されているのです。

この新しい空間を「ラーニング・コモンズ(=Learning Commons)」または「インフォメーション・コモンズ(=Information Commons)」と大学図書館業界では呼んでいます。1990年代はじめにアメリカの大学図書館で作られ始めました。図書館の中に個人での自主学習以外に、パソコンと紙の資料(本や雑誌)を広げつつ、複数名で話し合いながら学べる空間とでも言ったらよいのでしょうか。この背景には、インターネットやIT技術の進化により、「情報の流れ」と「学習の仕方」が変わったことが挙げられます。

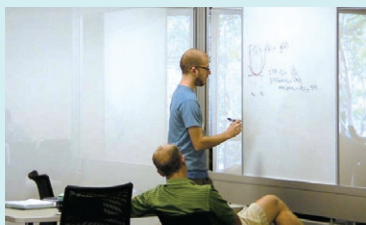
図書館は、主に「本を借りるところ」、「静かに自習するところ」というイメージをもっている方が多いと思います。しかし、大学図書館は、今回ご紹介したような新しい形に変わりつつあります。今後、西南学院大学図書館でも良いところは取り入れ、皆さんがより利用しやすい環境とサービスを提供していきたいと思っています。

※アメリカ南部の中心都市、ジョージア州アトランタにある州立大学。学生数は約18,000人。アメリカ国内の公立大学を評価するランキング(US News & World Report's Top Public Universities)で常に10位以内に入っている。学部は建築学、工学、化学、コンピュータ、経営、リベラルアーツの6課程。最新科学とテクノロジーを通して人の生活を向上させることを追及する、アメリカでトップクラスの研究大学のひとつ。

(写真: 著者撮影)



[写真1: 共同ワークスペース(西棟2F)]



[写真2: 共同ワークスペースで話し合っている学生]

冊子体資料も使ってみよう！

最近は、データベースや電子ジャーナル、web情報が注目されています。また、簡単に検索が出来るのでとても便利です。しかし、図書館には有用な冊子体の参考図書もたくさん所蔵しています。また、データベース化されていても冊子体がどのような編集をされているのか、一度確認しておくにより活用できるものもあります。

角川 日本地名大辞典

角川書店、1978-1991 【開架1階 291/033/6-1～6-47】

日本の各都道府県ごとに1巻と別巻2巻を加えた全49巻からなる地名辞典です。古代から現代までの地名を都道府県別に網羅し、地名の由来と歴史を明らかにし、現状も記録した本格的な地名大辞典の集大成です。



第40巻 福岡県P.864～

ちくぜんのくに 筑前国

約2ページ半に渡り、古代～近世までの歴史が記述されています。この記述だけでも、基本的な事項は抑えることができます。[古代]の項目に注目してみると、この地方が筑前・筑後に分かれたのが7世紀最末期と考えられていること、筑前国府は現在の太宰府市にあったと考えられていること、大宰府との関係等を知ることが出来ます。また、当時の資料が古代法典の「延喜式」に記述されていることも読み取ることが出来ます。

※有料ですが、携帯電話向け辞書サイト「JLogos」でも検索できます。

どんな
歴史書があるのか
調べてみよう！

地名や
その歴史について
調査してみよう！

延喜式も
調査してみたい。

国史大系

国史大系刊行會、1929-1964 【開架 210/082/1-1～1-35】

『国史大系』は日本史を研究する上での基本的な古典籍を集成し、校訂した叢書です。



第26巻に『延喜式』が掲載されています。

P.566民部の西街道に関する記述の中に「筑前国」を確認することができます。また、続く主計では、都から大宰府までの旅程が行き、帰り、海路に分けて記載されています。

国書総目録

岩波書店、1967 [開架 025/1/9-1～9-9]

国初から慶応3年までに刊行された日本人による著作、編集、翻訳した書籍(国書)が、全国のどの図書館や文庫に所蔵されているかを記載した全9冊の総合目録です。続編として、『古典籍総合目録』岩波書店、1990[025/1/19-1～19-3]があります。



筑前という項目で調査すると、数多くの文献が存在することが分かります。所蔵している図書館等も掲載されています。また、写本、版本、活字・複製・謄写本の情報が掲載されているものもあります。このようなものを所蔵している場合もありますので、OPACで検索してみると見つかることもあります。

国文学研究資料館のホームページで追加情報も含めたデータベースが公開されています。
http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html

もちろん、**図書館OPAC**も検索してみます。福岡関係の調査であれば、福岡県立図書館、福岡市総合図書館を頼ってみることも必要です。多くの専門資料、専門スタッフが調査を助けてくれます。歴史資料は検索の困難なものも多いので、専門スタッフを頼ることも1つの方法です。

福岡の昔のこと
特に

「筑前国」

について
調べてみたい!

定本柳田國男集

筑摩書房、1961-1971 [開架3階 380/81/2-1～2-36]

日本民族学の確立に貢献した柳田國男の著作集。民俗に関する身近な疑問が生じた際にヒントとなることが多いです。



『別館5』が索引となっており、とても便利です。「筑前」で引いてみると、掲載されている巻数、ページが分かります。その中の一箇所、4巻の『妖怪古意』を確認してみると、筑前博多地方で妖怪をどのように呼んでいたのか記述があります。

民俗学的な
視点からも
調べてみたい!

『ヴァティカン写本：ファクシミリ版』

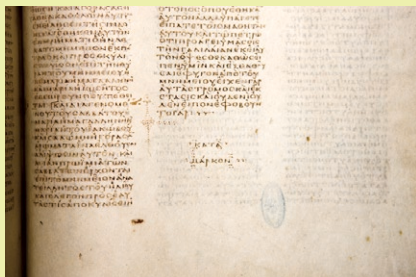


写真1: マルコ福音書の末尾

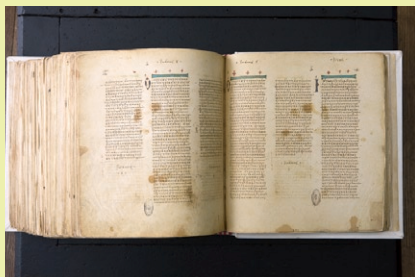


写真2: 各書の冒頭(ヨハネの手紙一、二、三)



写真3: ヘブライ人への手紙1:3欄外の落書き

P. Canart, P.-M. Bogaert, S. Pisano (ed.), *Bibliorum Sacrorum Graecorum Codex Vaticanus B*, Roma: Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato, 1999 [博物館展示中 193/5/70-1~2]

これはヴァティカン図書館に所蔵されているギリシア語写本1209番(ヴァティカン写本、略号B)のカラーファクシミリで、1999年にキリスト教2000年を記念して刊行された450部のうちの一冊である(2001年度神学部高額図書予算で購入)。このヴァティカン写本は現存するギリシア語聖書写本の中ではほぼ全巻が揃っているものとしては、最古最良の本文を伝えており、世界各国で翻訳されているギリシア語聖書校訂版の最も重要な典拠のひとつとされているものである。

たとえばマルコ福音書の末尾(写真1)は、この写本では16章8節の「彼女たちは〔空の墓で天使からイエスの復活を知らされたことを〕誰にも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」という言葉でいささか唐突に終わっている。この唐突さを修正しようとして後代の写本はさまざまな結びを付加しているが、ヴァティカン写本をはじめいくつかの古くて質の高い証言はここで終わっており、それらが典拠となって、これが元来の末尾であったと考えられている。

旧約聖書は創世記の大半とマカベア書およびマナセの祈り、新約聖書では牧会書簡とヘブライ人への手紙の後半以降を欠いている。オリジナルは全体で759葉、各3欄42行で27.5cm四方の羊皮紙に端正な大文字書体

で書かれている。写本が作成されたのは4世紀の第2四半期と推定されているが、最初の文字は色が褪せたため、15世紀にほとんどすべての文字がなぞられた。このカラーファクシミリでは、橙色の最初のインクとチョコレート色のなぞったインクを区別することができる。各書の冒頭を示す緑色の横棒と三つの赤い十字、その上の書名、本文最初の一字を左に出した大きな青い飾り文字(写真2)、句読点やアクセント記号なども、最初にはなかったが、後代に付け加えられたものである。

ヘブライ人への手紙1章3節の欄外には面白い落書きが残っている。この写本には何度も修正が加えられており、ある修正者が最初に書かれていたphanerōn「明らかにしつつ」という単語をpherōn「支えつつ」と修正している。これをさらに別の修正者が元に戻しているのだが、その際欄外に小文字でこう書いている。「まったく無学で出来の悪い奴め、古い人〔が書いたもの〕を放っておけ、作り変えるな!」(写真3)。この写本と向き合い、何とかしてその元来の文字を残そうとしていた情熱的な人物の怒りの声が聞こえてきそうである。

このファクシミリは大学博物館1階の聖書写本コーナーに展示されているので、是非ご覧になることをお勧めする。

編集後記

新入生の皆さん。入学おめでとうございます。ブックレビュー(新入生にイチ押し1冊)は、先生方・図書館職員から皆さんへの贈り物です。学生生活では、多くのことを経験して成長していただきたいと思いますが、その中にぜひ、読書を加えてください。卒業までの貴重な時間の中で、皆さん自身の「イチ押し1冊」を発見してください。

図書館はいつでも貴方の来館をお待ちしています。

(D.Y)

西南学院大学図書館報 No.168

2010(平成22)年4月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>